

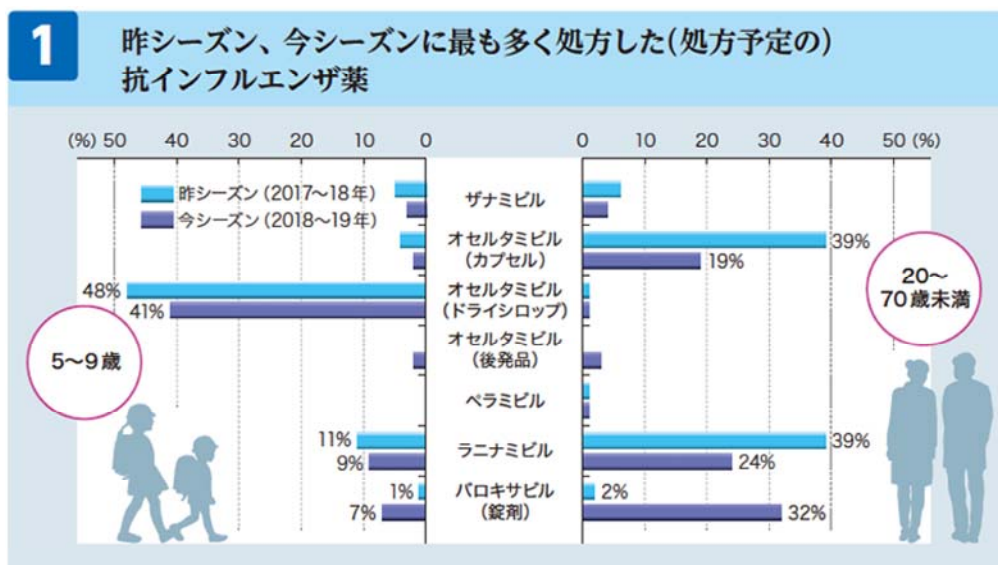
【抗インフルエンザ薬】バロキサビル

7割がバロキサビルの「処方増やす」、新旧薬の世代交代が進む年に

🕒 2019年01月22日 17:01

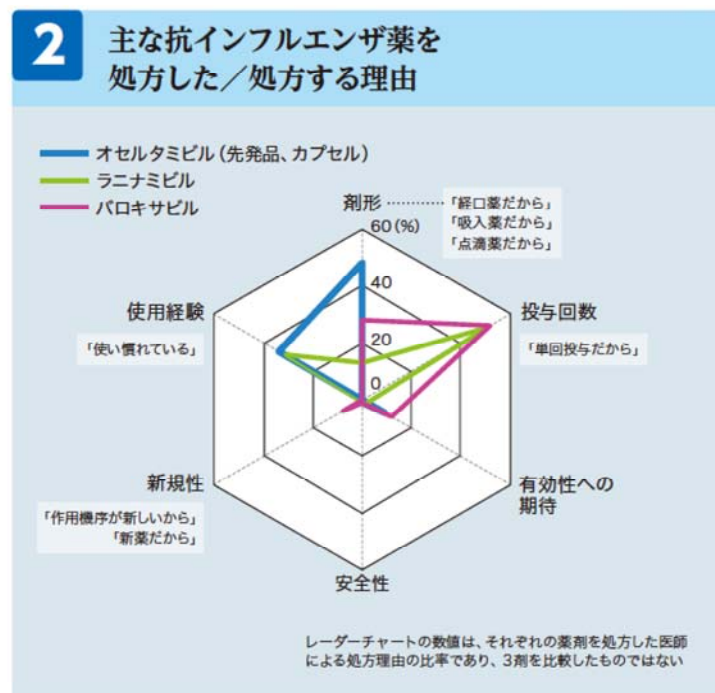
🗨️ [7コメント](#)

いよいよインフルエンザの流行シーズンに突入した。1回内服するだけで効果が期待できるバロキサビル(商品名:ゾフルーザ)の登場により、インフルエンザ治療はどう変わるのか。Medical Tribuneでは、インフルエンザ治療に携わる医師約200人にアンケートを行い、結果を分析するとともに、専門家へのインタビューを踏まえて治療動向を探った。調査結果を見ると、7割近くの医師が今シーズンにバロキサビルの処方を「増やすつもり」と回答。逆に、従来多く処方されてきたオセルタミビル(タミフル)やラニナミビル(イナビル)の処方が減り、新旧薬の世代交代が進む構図が見えてきた。

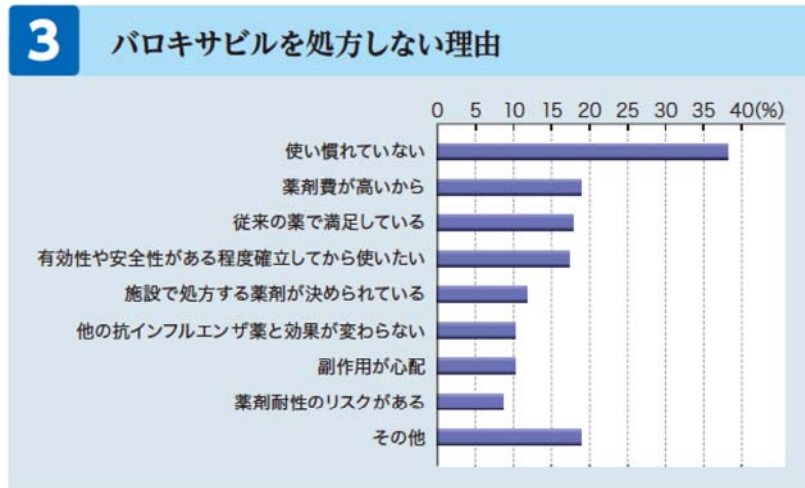


調査では新薬の登場による処方への影響を調べるため、バロキサビル、オセルタミビルの先発品と後発品、ペラミビル(ラピアクタ)、ラニナミビル、ザナミビル(リレンザ)の6種類の抗インフルエンザ薬を提示。患者を「0～4歳」「5～9歳」「10歳代」「20～70歳未満」「70歳以上」の5つの年齢層に分けて、各薬剤の処方状況や今後の意向について回答を求めた。

昨シーズン最も多く処方されたのは、0～9歳の小児、20歳以上の成人ではオセルタミビル(先発品)、10歳代ではラニナミビルだった。年齢層で違いはあるものの、4～6割が両剤を挙げていた。それに対し、今シーズンに最も多く処方した、または今後処方すると思う薬剤については、10歳代ではラニナミビルに代わってバロキサビルがトップに立ち、20歳以上の成人ではオセルタミビル(先発品)に代わりバロキサビルが最多となった。3割が同剤を挙げており、既存薬からバロキサビルへの切り替えが急速に進むと予想できる。



バロキサビルを処方した／処方する理由としては、「単回投与」「経口薬の単回投与」が圧倒的多数を占め、投与の簡便性が高く評価されていた。一方、オセルタミビル(先発品、カプセル)は「経口薬」「使い慣れている」、ラニナミビルは「単回投与」「使い慣れている」が上位に挙がり、各薬剤の特性が評価されていた。



昨シーズンにおけるパロキサビルの使用状況を見ると、処方した医師は約2割にとどまったものの、今シーズン中に67.2%の医師が処方を増やす意向を示した。

実際にパロキサビルを処方した医師の75.5%が「効果が高かった」と評価した。

一方、パロキサビルを処方しなかった理由としては、4割弱が「使い慣れていない」と回答した。裏を返せば、初回の処方での良さを実感できれば、今後処方を増やす可能性が高いとも読める。

また、「副作用」は10.1%、「薬剤耐性のリスクがある」は8.6%の医師が挙げた。新薬であるため、使用患者が広がった場合、予期しない副作用や薬剤耐性ウイルスが出現する可能性は否定できない。日本感染症学会ではパロキサビルで耐性(変異)ウイルスが高率に発生することが報告されているとし、「臨床効果への影響、周囲への感染性は現在のところ不明」と指摘しており、当面は慎重な取り扱いが必要になりそうだ。

【専門家の視点】日常臨床でどう使うか

けいゆう病院(横浜市)感染制御センターセンター長 菅谷 憲夫氏

バロキサビルは治療が1回で済むため利便性が高く、コンプライアンスに優れる点が特徴だ。成人患者での臨床症状の改善効果はオセルタミビルと同等だが、バロキサビルはウイルス量を減らす力が強く、周囲への感染性が低下する可能性も示唆されている。



ただ課題もある。バロキサビルで治療したインフルエンザウイルスA香港型(H3N2)の成人患者(12歳以上)の9.7%、小児(12歳未満)の23.4%でウイルスが変異し、薬に耐性を示した。仮に成人100万人に投与された場合、10万人に耐性が出る可能性があり、看過できない問題だ。さらに重要なのは、ウイルス変異の見られた成人患者は変異のない患者に比べて罹病期間が13時間長く、小児患者では37時間(変異のない人の1.8倍)長くなることだ。国のサーベイランスでは、オセルタミビルやペラミビルでも耐性変異ウイルスが1~1.9%程度検出されているが、そうした患者で罹病期間が延びるといった報告はない。バロキサビルの使用で生じた変異ウイルスがヒトに感染するかは不明であり、今後注視していく必要がある。

私見だが、バロキサビルは耐性変異が高率に出るA型インフルエンザ患者には使用すべきではない。一方、変異ウイルスの出現がほとんど報告されていないB型インフルエンザ患者や、ノイラミニダーゼ阻害薬のオセルタミビルやペラミビルとの併用で重症の入院患者に使用することが期待される。

◎調査概要: Medical Tribuneウェブの会員医師を対象にウェブアンケートを実施。調査実施日は11月26日で、198人(内科医99人、小児科医99人)から回答を得た。開業医と専門医の割合は、小児科は49.5%と50.5%、内科は50.5%と49.5%だった。

(小沼紀子)